校内感染外伝 ～ 佐和山こずえ ～

永作ワラヤ

プロローグ

「んひっ！　んひいいっ！」

首を振り、膝下をばたつかせて抵抗する佳香。

最も敏感な部分を剥かれた衝撃に太腿のお肉が震え、尿道口に微量の小水が滲んだ。

「胸なら担任の川島先生の方が大つきいって」「九十センチ近いでしょ。あたしもあの半分でいいから欲しいよ」「あんた、一生無理」

車の外を賑やかな笑い声が通り過ぎていく。

目隠しのついたての隙間から、女生徒たちのスカートの裾が見えた。

「もっと剥いて。根元まで完全に」

「んひいっ！　あああああっ！」

当の川島佳香先生は、剥き上げられたクリトリスにフラッシュを浴びている真っ最中だ。

女生徒たちとの直線距離は二メートルほどしかない。

「くひいいいっ！」

脚を動かそうとして力が入るたびに、膣穴が収縮し同時にクリトリスもかすかに動く。

「クリ豆大きいじゃない。アーモンド型ね」

助手席の女が指先でクリトリス亀頭を『ちょん』とつつくと、一呼吸遅れて佳香が腰を振り立てた。

「んひいっ！」

「ここ、効くよね」

勝手にクリトリスを弄られ、悔しがってもがく佳香だが、手足は動かないので乳房が空しく揺れるだけだ。

「この女、ちびりそうになってますよ」

「そりゃ、心構えなしにクリ弄られちゃったら。ねぇ？」

マスク姿の女たちが楽しそうだ。

佳香がワゴン車に引きずり込まれたあの屈辱の日を忘れたことは一日たりともない。

後部座席で髪の長い佐緒里ナースの指示を受けて佳香の股をこじ開け、クリトリス包皮をめくり上げた採用二年目の若いナース。それが佐和山こずえだった。

これは、そのこずえが女子高生だった頃のお話である。

一．こずえ、カイボーを回避する

「え～っ、風紀委員長が襲われちゃったの!?　いつ!?」

「一昨日の放課後みたいだよ」

夏休み前のとある放課後、三年二組の教室。

部活に向かおうと席を立った佐和山こずえの耳に、女生徒たちの会

話が聞こえてきた。
襲われた？　何の話？
つい足を止めて聞き耳を立ててしまう。
「あの人なら、いつもの調子で一喝して追い返しちゃいそうじゃん」
「それが駄目だったらしいよ。寄ってたかってヒン剥かれちゃってさ」
振り返ると声の主は川内聖南（かわうちせいな）と南静香（みなみしずか）だった。こずえは取りたてて二人と親しいわけではなかったが、御多分に漏れずその手の話は大好物である。
「ねえ、風紀委員長って三組のキツい感じの子でしょ。あ、ごめん。聞こえて来ちゃったからさ」
好奇心丸出しで近付くと、川内聖南が「いいよ、いいよ」と手招きしてきた。ドヤ顔をしている。女子の間では、この手の情報をもたらす者はヒーローなのだ。
「現場を目撃した知り合いの子から聞いたから、確実な話」
「……どこまでされちゃったの？」
思わず身を乗り出すと、聖南が周囲に男子がいないことを確認して、
「マンコ弄られちゃってお汁垂れ流し」と声を潜めた。
「マジで？」
こずえも思わず周りを見回してしまう。
「クリトリスを剥き弄りされて、ヒィヒィ叫び通しだったらしいよ。オシッコも漏らしたみたいだしさ」
「剥き弄り……」
女の急所を攻められたのなら失禁してしまうのも理解できる。
聖南が「あの風紀委員長サマも、所詮はただの女だったって事よ」と笑う。
静香は「クリを狙われたらその気がなくたって濡れるって」と同情的だが、口元がほころんでいた。

聖南によると、風紀委員長襲撃事件は次のような次第だったらしい。
現場は正面玄関の下駄箱の裏。こずえもそこにはちょっとした空間があって、掃除用具が置いてあることを知っていた。
犯人は四人でうち一人は女生徒。すっぽりとマスクを被っていて顔は見えなかったそうだが、一年のカイボークイーンと異名を取る女生徒が率いるグループだろうとの事だった。
襲われた風紀委員長は十分以上も激しく抵抗したそうだ。乳房をはだけられ、マンコも晒されてA（アダルト）V（ビデオ）もかくやの有様だったらしいが、とどめは女生徒によるクリトリス弄りだったようである。
「悲鳴がクリトリスを弄られ始めると怪しくなって、最後はオシッコ噴きながらアヘッたみたいだよ」
「へぇ……」
あの風紀委員長がそこまで恥ずかしい姿を晒したとは。こずえは目を丸くした。

「これでカイボーグループ処罰強化の動きが立ち消えになるのは確実だよね。旗振り役が襲われちゃったんだからさ」
静香が声を上げると、聖南も「あたしもそう思う」と同意した。
「だって風紀委員長ったら、お汁まみれでクリトリス膨らませたマンコを開かれて撮りまくられたんだもん。当然ヨダレ垂らした顔もセットでさ」

こずえが「うわぁ悲惨」と仰け反る。
「そりゃそうでしょ。口封じのために『お見合い写真』を撮るのは常套手段じゃん」
聖南は「マンコ全開に広げて、クリトリスを根元まで剥いて、乳と顔が入るようにカメラ構えて『はいチーズ』って感じでさ」と笑うのだった。
「ピンコ勃ちの乳首の先っぽが湿ってたってさ。よっぽど気持ち良かったんでしょ」
「ええっ、乳汁まで出したの⁉」
「うん。アレは乳汁で間違いないはず……って目撃した子が言ってた」
静香が「だってクリトリス剥き弄りされたんだよ。女ならマジイキするって」と含み笑いを漏らした。
「しかも証拠写真付きで言い訳出来ないし」
「風紀委員長じゃなくたって、イカされ直後の勃起クリと濡れた穴を顔つきで撮られたら、黙るしかないっしょ」
「まあ、そうだよね……」
こずえも自分だったら泣き寝入りだろうと思った。
いくら悔しくても、現場写真をばら撒かれる危険を冒してまで、カイボーグループを追及する勇気なんかない。どんな藪蛇が潜んでいるか分かったものじゃないのだ。
「風紀委員長の場合は、失禁させられるところまで撮られたんだもん。尚更だよ」
聖南がまるでその場で見ていたかのように風紀委員長襲撃事件の有様を語るので、こずえは大いに好奇心を満たすことが出来た。何せ右の小陰唇の内側にホクロがある事まで知っているのだ。
一体どれだけ近くで見たのだろう。羨ましい。
「抵抗してるのにイカされるってよっぽどだよね。やっぱ、我慢出来ないほどの快感だったのかな」
「風紀委員長も、クリを弄られてこれはヤバいと焦ったんじゃない？　クリ豆の裏スジをくすぐられながら、ガクガク腰を揺さぶり立てて必死の抵抗だったみたいだし」
「そ。オシッコ漏らしながら悔しがっちゃって」
「それでもイカされちゃうんだから、クリくすぐりって効くんだね」
「イキ過ぎて自力でお股閉じられなくなるみたいよ？」
静香がクスクス笑った。
「風紀委員長も、一年坊主にそこまでイカされたら、当分は大人しくするしかないだろうね。あ～、あたしも見たかったな」
こずえが本音を漏らす。
「正面玄関の下駄箱裏って『メッカ』みたいだよ。他にもあそこで捕まった子知ってるし。校門が閉まる時間が狙い目らしいから、覗いてみたら？　すごいの見られるかもよ」
聖南がニッと笑った。
「へぇ……」
「アタシの知る限りでは月曜と水曜がアタリかな」
「今日じゃん」
「風紀委員長が襲われた現場だし、験がいいかもよ？　行ってみなよ」
静香も熱心に勧めてくる。

「ふぅん……行ってみようかな」
こずえがまんざらでもなさそうな顔を見せた。
それから部活に遅れそうだと気付いて、「また話を聞かせて」と早足で教室を出て行く。

「釣れたかな？　ふふっ、姫に連絡入れておかないと」
「あの子ってムチムチだもんね。見応えありそう」
こずえは背後で聖南と静香が、「ごめん」とおどけた仕草で手を合わせていたことに気付かなかった。

「一年のカイボーグループかぁ……」
部室に向かって歩きながら、こずえは記憶を探った。
クイーンと呼ばれる女生徒については名前も顔も知らないが、そういうグループがいることくらいは聞いたことがある。
一年坊主のくせに、上級生をお構いなしで襲うそうだ。こずえの周りにも、そいつらの犠牲になった知り合いが何人か存在した。
クイーンの手によって女子はイカされ、男子は射精させられる。
女子の場合は、風紀委員長がされたようにクリトリスを狙われるので、マンコ持ちである限り、イカされる運命から逃れようがないらしかった。
「あたしも用心しなくちゃ」
こずえは軽く身震いした。
ムチムチの体型に加えてクラスで一番の乳娘と来れば、標的にされそうなことくらい想像がつく。

こんな短いスカートなのだから、クラスの男子にパンツを見られたり、たまにスマホを入れられて逆さ撮りされたりするくらいは仕方ないとしても、下級生の女子にオモチャにされるのは御免だった。
途中で廊下の前方に風紀委員会室が見えたので、窓越しに中を窺ってみる。
「あ～、いたいた」
こずえは、ホワイトボードの横に腰掛けた風紀委員長の姿を見つけた。
会議中のようで、風紀委員の腕章をつけた生徒たちがコの字型の机に居並んでいる。
「心ここにあらずって顔してるし」
こずえは風紀委員長の表情を見てクスリと笑った。いつもの気の強さは影を潜めてしまい、口を半開きにボケッと中空を眺める姿は単なる小娘だ。
「マンコを弄り倒されて大人しくなった感じ？」
聖南たちに生々しい暴行現場の様子を聞いたばかりということもあり、容易にその有様を想像出来た。
下級生にイタズラされちゃって。イカされちゃって。あー恥ずかしい。
こずえが抱いた思いは、大抵の女子が思うところと同じはずである。
「おっと……」
視線を感じたのか、風紀委員長が不意にこちらに顔を向けたので、こずえは慌ててドアの前から離れた。

「待て、佐和山。お前はいつになったら進路調査票を提出するんだ？」
「げ」
今度は進路指導の教師に捕まった。
「げ、じゃないぞ。春に訊いた時は看護学校に進学希望とか言っていたが、気持ちは変わらないのか？」
「え、ええと……一応その方向で行こうかなと」
「だったらそう申告せい」
「すんません。まだ気持ちが固まってないもんで」
「そうか。お前は合格安全圏には一歩足りんが、可能性はあるぞ。確か弱点は数学だったか……丁度いい、職員室に来い。資料がないと確かな事は言えんからな」
「ええー」
「お前の将来だろうが。いいから来い」
そしてこずえはそのまま職員室に連行され、進路指導を受けることになった。
途中でクラブの後輩とすれ違ったので、少し遅れるけれど顔を出す旨、伝言しておく。

そして職員室で教師と膝をつき合わせての面談が始まった。
「で、志望動機は？」
「動機っすか。えーと、何となく」
「お前はアホか。面接でそんなこと言ったら一発アウトだからな。建前でいいんだよそんなものは」
「そうすか。えーと」
教師に進路調査票の空白を埋めてもらいながら、こずえは頭を掻いた。
こずえは男性教師に本当のことを口に出来るほど図太くはないつもりだ。
日常的に他人の性器を見て、触れることが出来る職業。女医は逆立ちしても無理だけれど、ナースなら何とか。それが動機の全てだった。
経験を積んで保健師の資格を取ったら食いっぱぐれの心配はないかもと言う計算もあるにはあるが、メインはあくまでもお股だ。
「白衣の天使にあこがれてってのはどうっすかね」
「月並みすぎるな」
「駄目すか。えーと、それじゃ」

こずえの脳裏を、診察台の上でナース三人がかりでヒン剥きにかけられていた女性の姿がよぎる。
あれはこずえが中一の時。中待ちで順番待ちをしていた際に、偶然目にしてしまったのだ。
悪態をつきながら抵抗する女体。飛び出す乳房と、もやっと黒い恥毛。そして極めつけは女性がこずえの正面で股をこじ開けられたこと。
こずえは、女性の脚が左右に泣き別れになるに従って陰裂が口を開き、『女』を曝け出される一部始終を目撃したのである。コンニャクみたいな質感の小陰唇が分かれたと思ったら、尿道口と洞穴のような膣穴が見えて。小陰唇の上の合わせ目には、小指の先程の丸っこいお豆が覗いていた。

アレは見物だった。

次は高二の夏に、検査入院した男子の見舞いに行った友人の話を聞かされたことだ。

何でも友人が病室を訪れた時、彼はナースたちに『抜かれている』最中だったらしい。

ゴシゴシとしごかれるチンポがどんどん固く大きくなり、ついには精液を噴き上げる瞬間を目の当たりにした友人を、心から羨ましく思ったものだ。

ナースになればそういうことが出来る。あたしもナースになりたい。

こずえはずっとそう思い続けているのだった。

「こら、何をボケッとしてる。ちゃんと考えてるのか？」

「え？　それじゃ保健師を目指したいってのはどうすか」

「ふむ、保健師か。白衣の天使よりずっと具体性があるな。そいつで行くか」

進路指導の教師が、無骨な手に似合わぬちまちまとした文字を、調査票に書き込んでいく。

これは当分かかるかも。こずえはちらと時計を見て、心の中でため息をついた。

これから部活に出たら、帰りは閉門後になるだろう。そうすると玄関も鍵をかけられてしまうので、当直教師に理由を言って裏口を開けてもらわなければならない。玄関まで戻るのは面倒だから、あらかじめ下駄箱から靴を持って行く方が良さそうだ。

そして三時間後。

廊下の西側の窓から差し込む日没直前の弱々しい光が、リノリウムの床にぼやけた影を落としていた。すでに正面玄関は閉ざされて鍵がかかっている時間だ。

人影の絶えた正面玄関脇の下駄箱裏。その四畳半よりも狭い空間に、数名の男女がひしめいていた。

校舎の天井には蛍光灯が灯っていたが、その空間を照らし出すほどの明るさはなく、薄暗かった。むしろ窓から差し込む残光の方が明るいくらいだ。

女生徒が二人、あられもない姿を晒してジタバタしている。襲われていることは明らかだった。

一人は男に羽交い締めにされ、黒髪ロングの女生徒にパンティの中に手を入れられて、しきりに脚をもがかせながら悲鳴を堪えている。女生徒の指先がまさぐっているのは、股当ての中央から少し上がった辺りだ。

襲っている連中は女一人と男三人。上履きの色から一年生と思われた。

女生徒の太腿が不規則にビクンと震える。それもそのはず、彼女はパンティの下で一年の女子にクリトリス器官を摘まれているのだった。

その隣では男二人に仰向けに押さえつけられたもう一人の女生徒が、乳房をはだけられてヒィヒィ叫んでいた。短いスカートが捲れ上がり、パンティが丸見えだ。

こちらの女生徒は、男たちに陥没乳首を引っ張り出されている最中

だった。
　クリトリスを摘ままれている女生徒の名は川内聖南。乳首を弄ばれている方は南静香。そして二人を取り囲んでいるのは、件のクイーンが率いるカイボーグループだった。

「先輩、また無駄足じゃないですかぁ。これで三回連続ですよ？」
「くひっ……ああっ……や、止めてっ……」
　ジワジワとクリトリス包皮を剥かれる衝撃に、聖南は返事もままならない様子だ。
「嫌ぁぁぁぁぁっ！」
　静香のけたたましい悲鳴が、ワンワンと壁に反響する。
　どうやら聖南と静香は、こずえを嵌めそこなった責任を取らされているようだった。

「押さえといて」
　一年の女生徒が聖南のクリトリスを摘まんだまま、空いている手で器用にパンティを太腿あたりまで引き下ろす。
「ひぃぃ……」
　露出した聖南の股間が露わになった。高三なのでさすがに生えているが、どことなくスジマン時代の面影の残る佇まいだ。
「先輩のマンコ弄るのって三回目だっけ？　もっと多かったかな？」
　カイボークイーンの少し舌っ足らずな声が、静香の悲鳴の途切れ目を縫って聞こえてくる。
　彼女の二本指の間には、摘まみ上げられて頭を出した聖南のクリトリス亀頭が見えていた。陰裂に第一関節まで潜った指先がガッチリとクリトリス器官全体を捉えており、ちょっとやそっと暴れた程度で外れそうもない。
「お友達、漏らしちゃったみたいだよ？」
　カイボークイーンが、すぐ隣の静香の股間に目を向けてクスクス笑った。こちらは陥没乳首を掘り出されながら失禁してしまったようで、パンティが湿って陰裂が透けて見えている。
「あ～あ、すごい顔して悲鳴上げちゃって。こっちの先輩って、毎回乳首掘られて失禁してるよね」
　静香はカイボークイーンに正面から顔を覗き込まれても、認識出来ていないようだった。
「ひぃぃぃぃっ！」
「マンコ出してやりなよ」
「よっしゃ」
　乳首を掘っていた男子が一人移動してきて、静香のパンティをズルズル引き下ろして片脚に引っかけてしまう。
　静香は下半身を裸にされたことにも気付いていないようで、脚の間に陰裂を覗かせてジタバタもがき続けるばかりだった。
　聖南のマンコが年齢相応に小陰唇を覗かせているのに対して、静香はよりスジマン時代の面影を残していた。恥毛も聖南の半分程度しかない。聖南よりも静香の方が尻が大きく脚も太いのに、女性器全体の佇まいは幼く見えた。両者共に陰裂の上の方に、肌色のクリサヤが盛り上がっている。
「嫌ぁぁぁっ！」
　静香が時折、陰裂の真ん中からピュッと小水を飛ばした。
「ひぃぃぃぃっ！」

不意に窓の向こう側に顔が現れて、慌てたように引っ込んだ。それから少し間を開けて再び現れ、中の様子を窺ってにんまり笑う。

部活を終えたこずえだった。

教室で聖南たちに聞かされた話が頭を離れず、わざわざ裏門から遠回りしてやって来たのだ。

「中の連中に見つかったら、こっちの身が危ないかも……」

そう思ったこずえは、低い位置に二十センチほどの高さの通気窓があるのを見つけて、そちらから出歯亀を決め込むことにした。

せっかくカイボー現場に居合わせたのに、覗かずに引き上げるなどという選択肢はあり得ないのだ。

とは言え通気窓の位置は地面すれすれだった。こずえは膝をついて身体を斜めにしてみたり、無理に身体を折り曲げてみたりして何とか覗こうと頑張ってみたが、暴れる女生徒の足先しか見えなかった。

「はしたないけど……誰も見てるはずないよね」

こずえは仕方ないので、四つん這いになって尻を高く上げた体勢を取った。

後ろから見られたら、スカートの中が丸見えなんてものではないだろう。分かっているけれど、覗きたい気持ちには勝てない。

こずえは今時の女子高生なので、女子の間でダサいと馬鹿にされるブルマ重ね履きなんかしていなかった。静香よりも大きな尻とムチムチの股間を覆うのは、クロッチの細いビキニパンティだけだ。だから、当然のごとく布地は陰裂に食い込み、収まりきらないマン肉がこんもりとはみ出している。

さらにブレザー型制服のシャツの裾をスカートの外に出しているので、うつぶせになると重力の法則によって前がたるんで、隙間からブラジャーに支えられた大きな乳房まで見通すことが出来た。

「聖南じゃん！　何であの子が捕まっちゃってるの？　ってことは、もう一人は静香!?」

手前で襲われている女生徒の顔を見たこずえが目を丸くした。思わず目をこすって確認し直したが、クラスメートの聖南で間違いなかった。

もう一人は顔が見えなかったが、聖南は窓の近くで羽交い締めにされており、はっきりと見ることが出来たのである。

「うわ～。モロ弄られてるじゃん」

こずえの視線は聖南の股間に釘付けだ。

クイーンに下着の中に手を突っ込まれ、忙しくもがく脚。摩擦でブラジャーがずり上がってしまったようで、中々に立派な乳房がこぼれ出てゆらゆら揺れていた。大きめの乳暈がブラジャーの下に見え隠れしている。ピーンと勃った乳首が、カップの下に隠れることを阻んでおり、結果的に乳房の下半分を晒す羽目になっていた。

本人は頭を振り立てながら悲鳴を堪えている様子である。あの表情では乳房どころではないだろう。

そして聖南の身体の向こう側に見えている剥き出しのマンコ。

こずえに向かって股を拡げた体勢で抵抗しているので、見事なスジマンがくっきりだ。

「ぷぷぷ。顔は見えないけど、アレって静香だよね」

顔が見えなくたって、同性なら脚の形で分かる。

こずえが声を立てないように口を押さえて笑うと、制服の下でクラ

ス一番の乳房が波打った。
「や、や、止めてっ」
「ひぃぃぃっ！」
窓越しに悲鳴が聞こえてくる。静香の声の方が、手前の聖南よりもずっと賑やかだ。身も世もなく叫び続けている感じである。
陥没乳首を掘られる静香の脚は大きく拡げられたままだった。腰が時々大きくせり上がって、マンコの全貌を上から下まで曝け出す。
「あ～、失禁しちゃってるのかぁ」
スジマンの真ん中からシュッと小水が飛ぶのを見たこずえが笑った。
「……あたし、進路指導で捕まってなかったら、襲われてたじゃん」
そこに思い至ったこずえがブルッと身震いした。
本当なら、部活が終わったらまっすぐに下駄箱裏に向かうつもりでいたのだ。それに二人が自分を嵌めようとしていたことなんか、知るはずもない。
「やっ、止めてぇっ！」
ズルズルと太腿あたりにわだかまった下着を引き下ろされ、下半身を裸にされる聖南。これで下着の陰になって見えづらかった女性器の全貌が丸見えだ。
クイーンがクリトリスを摘まんだ手を離さないので、こずえはクイーンの指先にガッチリと捉えられ、包皮がめくれたクリトリス器官を目にすることとなった。
「ふぅん、聖南は普通に生えたんだぁ。クリ豆出しちゃって。静香は薄い方かな」
視界にマンコが二つ揃ったので、交互に眺める。
「これがカイボーなんだ……」
こずえが感慨深げに呟いた。
エッチ娘のくせに、『特等席』でカイボー現場を見たのは、これが初めてだった。
もちろんカイボー騒ぎに遭遇したことは何度かある。カイボーをやる連中はどの学年にもいるし、突発的に始まることも多い。だが、騒ぎに気付いて駆けつけても被害者はすでに人だかりに埋もれていて、ほとんど見えないのが現実なのである。
襲われているのが女子であれば悲鳴がうるさいし、男子であればギャラリーの女子が興奮して騒いでいるからそれと知れる。「射精した～」だの「イッた～」だの、ギャラリーの様子に注意していれば、何が行われているのかも想像はつくのだが、かぶりつきの特等席を確保することは至難の業なのだった。
それでも人だかりが散り始めるまで粘れば、お股を見ることは一応可能だ。被害者は精根尽き果てて伸びてしまうのが常で、性器を晒して大の字だからである。
こずえも何度か精液にまみれてクッタリ萎んだチンポとか、クリトリスも丸見えに淫汁を垂らしたマンコを目にしたことがあった。とりわけ女子は必ず失禁してしまうので、拡げた両脚の間に大きな水たまりが出来るものである。
その過程を自分の目で見たければ、このような機会を得るか、自分が首謀者になるか。そのくらいしか方法はない。
例外として身体検査を覗く手もある。というのも、女子はナースた

ちによって裸にむしられ、性器検査を受けなければならないからだ。しかし現場を覗くには、天井裏や床下に潜んだり保健室に近い木に登ったりする必要があるので、女子にはハードルが高かった。一部男子の執念によって、女子の身体検査は大体覗かれているとの噂はあるが、真偽は不明だ。

「うわー、拡げられちゃうんだ……」

こずえは、クイーンの指先が聖南の大陰唇を押し拡げる様子を目の前で見た。

小陰唇が出て、膣穴が出て、尿道口が出る。最初から剥かれたままのクリ豆は結構大粒だった。

聖南は、脚を閉じたいのにクリトリスを摘まれているせいで気を入れることが出来ず、ジタバタもがき続けているようだった。露出させられたナマモノの向こうには、撫で回される片乳房が見えている。

「そうだ、撮っておかなくちゃ」

こずえは慌ててスマホのスイッチを入れて動画撮影を開始した。少々気付くのが遅れてしまったが、まだ始まったばかりだ。

「あの子、なんか手慣れた感じ……」

口を開けた貝のような有様を呈する聖南のマンコを、クイーンの指先があっちをつつき、こっちをくすぐる。開かれたマンコは、イタズラされるに決まっているのだ。

指先の動きを見るに、こずえにはピンポイントで狙いを定めているように思えてならなかった。左側の小陰唇の外周部。陰裂上端の切れ込みが始まる辺り。聖南はその部分を刺激されると、太腿を震わせて反応するのを抑えられないようだった。

こずえも女だ。聖南が胸を反らせて乳房を揺らし、無理矢理イタズラされているのにも関わらず、剥かれたクリ豆を膨らませる様子を見れば、効いていることくらい分かる。

「まるで聖南の性感帯を知ってるみたいじゃん」

こずえが首をかしげる。

聖南と静香が数回にわたってこのグループの餌食になっていることなんか、知るはずもないのだ。

「ああっ！　ひぃっ！　ひぃっ！」

マンコ嬲りは続く。

羽交い締めの体勢から抜け出せない聖南は、性感帯を順番に刺激され、剥けたクリトリスの根元をチョイチョイとくすぐられてもがくばかりだ。

同性ならではのねちっこさに、聖南も悲鳴を抑制するどころではなくなってしまったようで、ついには静香に負けないボリュームで「ひぃひぃ」叫び始めた。

「嫌ぁぁぁぁぁっ！」

聖南の脚は拡がる一方だ。嫌がっているくせに、自ら腰を浮かせてクイーンの鼻先にマンコを差し出しているような体勢である。

マンコの向こうで揺れる乳房は、乳首が完璧に勃って今にも乳汁を飛ばしそうだった。

「聖南、このままイカされちゃうんじゃない？」

こずえが「一年坊主にやられて悔しいだろうなぁ」と言いつつ、スカートの中に手を入れた。同情はするけど、見届けずに立ち去るつも

りは毛頭ない。

「あああああっ！　あひぃぃぃぃっ！」

いよいよ聖南の腰が突き上がりっ放しになると、クイーンはクリトリスくすぐりに集中し始めた。

こうなった女は自力で股を閉じることが出来ない。だから脚をこじ開けて押さえつけておく必要すらない。聖南も例外ではなかった。

勃起して艶光りするクリトリス亀頭の根元辺り。小陰唇が合わさる接合部の少し深くなった辺り。その部分をクイーンの指先が執拗にくすぐる。聖南のもう片方の指先が、陰裂の頭を引っかけてぐいっと引き伸ばすので、クリ豆は土台から垂直に立ち上がってしまっていた。

「んひぃぃぃぃっ！　いやぁぁぁぁぁっ！」

聖南の尿道口がヒクヒク震え始めると、クイーンがすかさず身体を横にずらした。タイミングを合わせたように、大量の小水が噴き上がる。窓越しに音が響いてきそうな大失禁だ。

マンコを拡げられた状態はそのままなので、小水が小陰唇に当たって飛び散ることはなかった。

「うわ～……」

こずえは目を皿にして、聖南が失禁中もお構いなしでクリトリスをくすぐられる様子を眺めた。意識していないと、その場でオナニーを始めてしまいそうだ。

「ひぃっ！　ひぃっ！　あひぃぃぃぃっ！」

失禁させられる聖南は相変わらず腰を突き上げたままで、マンコの向こうにプルプル踊る乳房が見えていた。まさに『女の子』としか言いようのない姿だ。

「嫌ぁぁぁぁっ！　あひぃぃぃぃっ！」

クイーンが、小水を引っかけられない位置に待避したまま、指を動かし続ける。いかにも手慣れた印象だ。

「ひぃぃぃぃっ！　ひぃぃぃぃっ！」

失禁中もお構いなしでクリトリスをくすぐられ、聖南の尿道口から噴き出す小水は、勢いを増すばかりだった。忙しく腰を振り立てるので、失禁の放物線が乱れる。

「うわ～、すごい……」

こずえは息を呑んで聖南の惨状を見つめるばかりだった。

三年生の女子が、二つも下の後輩に為す術もなく失禁させられているのだ。

小水は止まらないし、乳房は揺れまくりだし、乳首だってこれでもかと勃ってしまっている。

「いひぃぃぃぃっ！　あひぃぃぃぃっ！」

クイーンが聖南の哀れな悲鳴顔を覗き込んで、何かからかっているようだった。しかし聖南本人は目の焦点が合っておらず、失禁の自覚があるのか怪しかった。

奥で捕まっている静香は、相変わらずマンコを晒されたままだ。ただ、乳首に指を伸ばしていた男たちは、聖南が失禁させられる様子を眺めて笑っており、静香もその間は乳首掘りを免れて太い脚をジタバタさせていた。

「嫌っ！　んひっ！　くひぃっ！」

膀胱が空になっても、聖南のクリトリスはクイーンの指先でくすぐられっ放しだ。

尿道口が開いたり閉じたり。空失禁を繰り返してもクイーンはイタズラの手を緩めようとしない。プルンプルンに踊る乳房が女らしかった。

「ひぃぃぃぃぃっ！」

クイーンが時々聖南の表情を確認してはニヤニヤ笑っている。

「あひっ！　あひっ！　駄目ぇぇぇぇっ！」

本人にその気がなくても、性感の塊であるクリトリスを狙い撃ちにされたのでは、我慢にも限界があるというものだ。

案の定、数分経たずして聖南の悲鳴のトーンが怪しくなってきた。

「んあぁぁぁぁっ！　あひぃぃぃぃっ！」

「うわ～、イカされちゃうんじゃない？」

聖南の膣穴から、白っぽいお汁が滲み始めたことに気付いたこずえが、顔を赤くした。

表情を見ると、聖南は目がロンパリに寄って口周りをヨダレで濡らし、メスの顔を晒す一歩手前になり果てている。

さっきまではイタズラから逃れようと抵抗を続けていたのだが、今はイカされまいと必死なのだ。

聖南の陥落が近いことは、こずえにも簡単に見分けがついた。時々クイーンが指先を二本ばかり膣穴に突っ込んでは濡れ具合を確かめているのだが、その度に溢れ出すお汁の量が増える一方なのである。

「ああっ！　ああっ！　んあぁぁぁぁっ！」

クイーンが聖南のクリトリスをくすぐりつつ、膣穴に突っ込んだ指先を抜き差しし始めた。

「ひぃぃぃっ！　やめてぇぇぇぇっ！」

聖南はなけなしの理性を振り絞って耐えているが、男に乳首も摘まれてしまっているし、膣穴から溢れ出すお汁が尻のワレメを伝って、床に流れ落ちている。クリトリスと膣穴、それに乳首。どう考えても耐えられっこないことは明らかだった。

「うわ～、すごい」

こずえが聖南がイク瞬間を見逃すまいと目を見開く。

「ひぃぃぃぃっ！」

クイーンのイタズラから逃れようともがく聖南の太腿には、うっすらと筋肉の陰影が浮かんでいた。

クリトリスを弄られるせいで股が開いてしまうのは、大抵の女に共通の性質である。イカされたくないのにマンコを差し出した体勢に固まって動けなくなるのだ。それは女教師でもハイエースされたＯＬさんでも、小学生の女子でも同じ。だから襲撃者はクリトリスを狙う。とりわけ同性の場合は。

「いひぃぃぃぃっ！　あああああっ！」

聖南の開き切った尿道口がヒクヒク震え、腰が突き上がる。クイーンがここぞとばかりに指先の動きを加速させた。

「くひぃぃぃっ！　ぷふぇぇぇっ！」

「あ～あ、とうとうイカされちゃったかぁ」

こずえは聖南の乳首が乳汁を滲ませるのを見た。ヨダレを垂らしたものすごいイキ顔も、しっかりと記憶に焼き付ける。こずえ自身も暴行現場にあてられて下着が張り付いて透けるほど濡れて、乳首もトクトク脈打っていたが、自覚はなかった。

「見ぃちゃった」
聖南の『陥落』を見届けたこずえがにんまり笑う。
エロかった。いい見物だった。大満足である。

クイーンは、イカされた聖南を男子たちに払い下げて静香に向かった。『後は勝手に輪姦しちゃって』ということらしい。
クイーンの姿を追って奥に目を向けると、静香に聖南の様子を観察する余裕はないようで、晒されたマンコを隠そうと太い脚を忙しくもがかせていた。隠そうとしている割には脚が半開きで、太腿の奥に美味しそうな陰裂が見え隠れしている。陥没乳首の掘り起こしはすでに完了しており、ピーンと勃った両乳首が天井を仰いで並んでいた。
「BかCカップか。あたしの半分もないかな」
こずえが品定めする。
暴れても聖南みたいに揺れることはない。でも乳首掘りを食らった乳暈が大きく盛り上がっており、見た目はしっかりと『女の子』していた。

「イヤァァァァッ！」
静香はいとも簡単にマンコを拡げられた。
最初から乳首掘りに気を取られて下半身がお留守だったので、クイーンは脚の間に入ってしゃがんだだけである。
「ひぃぃぃぃっ！」
慌てた静香が股を閉じようと焦るがもう遅い。
男子たちに太腿を両側から抱えられてしまったのだ。そもそもクイーンが脚の間に陣取っているので、股を閉じることが出来ない。

「イヤァァァァッ！」
「ふぅん、聖南より見た目はいいじゃん」
こずえはベロンと露出させられた静香のナマモノに目をこらした。
静香が捕まっているのは奥の方だったので照明もやや暗かったが、観察に支障があるほどでもない。
「あたしのマンコとちょっと似てるかも？」
こずえはそんな気がした。
ナマモノの印象が全体にあっさり目で、小陰唇が目立たないタイプ。スジマン娘の特性かもしれない。陰裂の上半分を占めるクリトリス器官はくっきり判別出来るが、サヤと小陰唇の接合部分がピタリと合わさっていて、クリ豆は見えなかった。
ちなみにこずえは、マンコを思い切り広げられるとクリ豆も剥けるクチである。

「ひぃぃぃぃっ！　ひぃぃぃぃっ！」
クイーンの指先が、静香のキンキラ声を気にとめる素振りもなくクリトリス器官をまさぐって動く。聖南にしたように、最初からクリトリスを剥いてしまう心づもりらしい。
静香がガクガクと腰を揺さぶり立てて抵抗する。クリトリスを剥かれかけていることを認識出来ているようだ。
「くきぃぃぃぃっ！　あひぃぃぃぃっ！」
静香の悲鳴と抵抗は激しいが、こずえがいくら目をこらしても現れるはずのクリ豆は確認出来なかった。クイーンが同性のクリトリスを剥きそこなうはずがないので、おそらく真性のクリトリス包茎なのか、クリ豆が小さいのか。

「……アレがそうじゃないかなぁ」
こずえはクイーンの指先の下にかすかに覗く肉色の襞を見つめた。
クリトリス包皮が裏返っているから、クリトリス包茎の可能性は低い。
小陰唇の上端が合わさる少し上あたり。クリトリスが埋まっているのはあそこしかあり得ないはず。その部分の包皮がめくられて肉色が見えているということは、それが静香のクリトリスということだ。
「クリがちっちゃい子だったのかぁ」
こずえはそう結論づけた。
もっと近付ければはっきりするけれど、そういうわけにも行かないのがもどかしい。

クイーンは右手で静香のマンコを拡げたまま、ポケットから化粧筆を取り出した。
静香に何か話しかけながら、おもむろに筆先をクリトリスに近付けていく。多分「我慢できるかな」とでも言ってからかっているのだろうが、窓越しにセリフを聞き取ることは不可能だった。
「くきぃぃぃぃっ！」
静香は筆先にクリトリスをくすぐられた瞬間に、パカーッと大股を拡げて腰を突き上げ、小水を噴き上げた。太い放物線が数メートルも飛ぶ大失禁だ。こずえの位置からも、静香の拡げられたマンコのど真ん中から、小水が噴き上がる様子がよく見えた。
もちろんクイーンは、身体を斜めにかわして小水をかぶるようなヘマはしない。
「……静香ったら、1秒持たずに失禁させられてるし」

こずえは思わず自分のスカートの中に手を入れた。マンコを押さえていないと『もらい失禁』してしまいそうだった。
「やっぱり、クリが小さい子だったのかぁ」
女が瞬時に失禁させられたのであれば、クリトリスしかない。だから肉色の襞に見える部分が、静香のクリトリスなのだ。こずえは結論づけた。

激しく小水を噴き上げる静香の手前では、聖南が男たちに輪姦されている。
聖南はイカされて朦朧とした状態から回復していないようで、膣穴にズッポリとチンポを入れられているにも関わらず、犯されている自覚がないように見えた。悲鳴も上げておらず、緩慢に脚をもがかせながら口をパクパクさせて喘いでいる。
「こっちも、しっかり記録しておかないとね」
こずえはスマホを聖南と静香が同時に収まる構図に構え直して、ニンマリ笑った。

「本当に手慣れてるなぁ。あの子、どれだけ女の子を襲っているんだろう」
小水を噴き上げる静香のクリトリスをくすぐり続けるクイーンの動きに、こずえが感心したように呟いた。
静香は大股拡げた体勢に固まっているとは言え、抵抗を諦めたわけではない。上下左右に乱れる放物線を器用に避けつつ筆を動かし続けるなんて、とても難易度が高いと思うのだが。
つまり、クイーンは女の失禁パターンを知り尽くしているのだろう。

「……あの子、まるで身体検査のナースだね」
こずえが皮肉っぽく唇を歪めた。
毎年の身体検査でお世話になる、女子高生の天敵の如き存在。それがナースだ。
彼女たちに捕まると、どんな女も逃れることは叶わない。マンコも乳房も、まな板に載せられた食材の如く『料理』されてしまう。こずえも春先の検査で、マンコを開き切られて悲鳴を張り上げた一人だった。
女子は陰裂の長さ、クリトリスのサイズ、小陰唇の長さ、膣穴の深さ、乳首の太さ、処女膜の有無……つまり、あらゆる恥ずかしい要素を計測され尽くされる。しかも勃起させるためにクリトリスを刺激されるので、ひとたまりもなく失禁してしまうのが常だ。
ナースたちは鞄に専用の器具を携えていて、どんなクリトリスでも簡単に剥いてしまう。そうなった女は自力で股を閉じることも出来なくなるので、逃れることは実質的に不可能と言えた。クイーンが最初にマンコを出して股をこじ開けるところから始めたのも、ナースたちと同じやり口だ。
クイーンの手際の良さは、そんなナースたちに迫るものがあった。
「静香ったらずっとクリトリスをくすぐられ通しだし」
クイーンは静香の膀胱が空っぽになっても、筆を止めることがなかった。聖南にしたように、静香も一気にイカせてしまうつもりなのだろう。
「くきぃぃぃぃっ！　あひぃぃぃぃっ！」
静香は尿道口が開いたまま。失禁したくても漏らすものが残っていないのだ。
「いひぃぃぃぃっ！　あぁぁぁぁぁっ！」
ガクガクと暴れる腰を男子たちが押さえつける。
クイーンの筆先は腰の動きに正確に追従しながら、クリトリス包皮の内側に潜り込んで、小さなクリ豆をくすぐり続けた。
マンコ越しに見える静香の乳首が、ピーンと真っ直ぐ天井を向いて尖っており、女を主張しているように見えた。
静香の反応を見る限り、クリ豆の大きさと感度に相関関係はなさそうだ。
「うわー、すごいね……」
手前では聖南が二人目に犯され始めたところだった。こちらはまだ朦朧としているようで、抵抗らしい抵抗がない。
「ひっ、ひっ、ひっ、ひっ……」
静香は聖南よりもくすぐられ耐性が低いようだった。
一分たたずに悲鳴のトーンが怪しくなり、太腿がブルブル震え始める。
「んひっ、んあぁぁぁぁっ！」
静香の包皮の切れ目からねじり込まれるように潜った筆先。その筆先にクリトリスをくすぐられ続ける静香の膣穴から、トロリとした淫液が滲んで尻のワレメを伝う。
恥毛の薄い静香のマンコは拡げられてしまうと、皮膚が伸びて毛穴の間隔が開き、無毛のように見えた。クイーンの親指が陰裂の頭にかかって引き伸ばすように押さえている影響もありそうだ。開き切った尿道口と、肉襞が重なった膣穴も丸見えだった。

「んあぁぁぁぁっ！」
程なくクリトリスをくすぐられ通しの静香が、ガクンガクンと腰を振り立てた。
「ぷぷぷ。イカされちゃった？」
こずえは、静香の反応からそうに違いないと確信したが、クイーンの筆先はお構いなしで動き続けた。
結果、一旦は力が抜けて沈んだ静香の腰が、再びせり上がる。くすぐられるクリトリスの向こうに見えている乳首なんか、哺乳瓶みたいに膨らんでしまっていた。
「うわ～、イッてるのにくすぐっちゃうんだ……静香、どうなるんだろう」
「んひぃぃぃぃぃっ！」
静香が立て続けにイク。
堰を切ったが如くに膣穴から淫汁がダダ漏れだ。
こずえは静香のイキ顔も見たかったが、こちらに脚を向けた体勢のため、目にすることは出来なかった。

静香は連続して4回もイカされた。
ようやくクイーンが化粧筆を遠ざけて立ち上がる。
静香は押さえつけていた腕が離れても、大の字でマンコを曝け出したまま、余韻でイキ続けているように見えた。
「お汁まみれ。ぷぷぷ」
こずえが呆れるほどに濡れぼそった静香のマンコを見つめる。
「あんなに乳首立てちゃって。ちょっと摘まむだけで、乳飛ばしそうじゃん」
近くで見ることが出来たら、乳汁も出てしまっているのではないか。そんな気がした。

一方で輪姦され聖南は、一度も正気に返ることなくイッてしまったようだった。はしたなく嬌声を上げてアへっている。
その向こうで、静香もまた男たちにたかられて輪姦され娘と化した。
クイーンは壁際に下がって腕を組み、犯される二人を満足げに見下ろして立っている。

「こんな連中に襲われたらおしまいだね」
こずえがブルッと身を震わせた。
三年生の女子が二人そろって、二つも年下の後輩に完膚なきまでに嬲り倒されたのだ。風紀委員長まで同じ目に遭わされたみたいだし。
「くわばら、くわばら」
こずえはしばらく輪姦される聖南と静香の姿にスマホを向けてから、肩をすくめて踵を返した。

翌朝。
こずえが登校すると、聖南と静香がいつもの席でひそひそ話をしているのが見えた。何だか周りの空気がどんよりと淀んでいるようで、あまり雰囲気はよろしくない。
（ぷぷぷ。二人揃って輪姦されちゃって）

こずえは心の中で嗤うと、イタズラ心を起こして近づいて行った。
「昨日は部活で遅くなって、見に行けなかったよ。せっかく情報くれたのに、ごめん」
「え？」「は？」
二人はギョッとして顔色を変えたが、そこは女である。すぐに落ち着いた風を取り繕った。
「そ、そう。もしかしたらって話だったでしょ。気にしなくていいって」
聖南が作り笑いを浮かべる。
「こ、こっちも忘れてたくらいだし」
静香は、聖南よりもいくぶん態度を装うことに成功していたが、顔が赤かった。
「あ、そうなんだ。もし二人がすごい現場を見ていたら、詳しい話を聞かせてもらえるかなって期待してたんだけどな」
こずえがニパッと笑う。
中々の役者ぶりである。
「どうだろうね。あ、あたしは何かあったなんて話は聞いてないけど」
「あ、あたしも。何かいい情報が入ったら教えてあげるよ」
輪姦され娘たちはしどろもどろだった。
「うん。期待してるからよろしくっ」
下手にからかって、覗いていたことがバレたら仕返し必至だ。この辺にしておこう。
こずえはとぼけた顔で自分の席に向かうのだった。

二、クイーンだって襲われる

あのクイーンと呼ばれる一年坊主は一体何者なのだろう。
こずえは好奇心を覚えて、部活の後輩に訊いてみた。
「いつの間にか、カイボークイーンなんて二つ名で一目置かれてたんすよ。普段はちょっと顔の可愛い、目立たない子なんすけどねぇ」
クイーンの隣のクラスだという後輩は、首をかしげながら知っていることを話してくれた。
何でも、入学してひと月ほどで男子たちを数人従えるようになり、『活動開始』したそうだ。
「襲われるのは女子だけ？」
「噂に聞くのは女子が多いけど、男子もやられてますよ」
「そうなんだ」
「はい。男子の場合はクイーンの手で射精させられるんすよ」
「射精……」
「ぴゅーって精液が飛ぶんです。あたし、一回だけ見ました」
「……」
こずえは射精の瞬間を見たことはないので、想像をたくましくするしかなかった。率直に言って後輩が羨ましい。
「で、女子はクリ……トリス攻めなんだよね」
「はい。女子はあいつらに襲われるとみんなメスにされるって噂で……かなりの数の女子がやられたはずなんすけどね。だれも恥ずかしくて表沙汰にしないんですよ。そのうち上級生や女教師まで襲われ始め

て、手がつけられなくなったってのが実態らしいすよ」
「メスねぇ……」
言い得て妙だ。こずえが片唇だけで笑う。
聖南も静香も、最後にはメス堕ちさせられていた。瞼の裏にお汁を垂れ流した膣穴や、乳汁が滲むほど勃った乳首が浮かぶ。あの理性を飛ばした痴態は、メスと呼ぶにふさわしいだろう。
それにしても、女教師が犠牲者に含まれているというのは初耳である。
「みんな知ってますよ。去年採用の国語教師とか、教育実習生とか。もっと襲われてるかもです」
「そうなんだ」
「はい。あいつら、襲った女を手駒にして、次の女を調達してるって噂ですから。ネズミ算式に被害者が増えていくんすよ」
「手駒？」
「知り合いとか気に入らない女とか、何でもいいからあいつらが待ち構えている場所に誘い出す役目っすね。うまいこと罠にかかればその場でヒン剥いて、メスに仕立て上げるんす」
後輩は、「襲われた経験のある女は容赦ないっすからね」と、分かったような顔で笑うのだった。結構エッチな子のようだ。
「ふぅん……」
まあ、女は感情の生き物だから、自分が襲われたら他の女も同じ目に、と考えるだろう。それは別に不思議ではない。
待てよ、もしかして聖南と静香って？　あたしを嵌めるつもりであんな情報を？
こずえの脳裏を疑念がよぎる。

でも二人はクイーン一味に襲われていた。現場もしっかりと目撃している。本気で抵抗する身体を押さえつけられ、無理矢理イカされていたことは疑いようのない事実だ。
「……う～ん、分かんないな」
「先輩、何かあったんすか？」
「いや、何でもない。ありがと」
こずえは墓穴を掘らないように用心して、話を打ち切った。
結局、クイーンについて大したことは分からないままだったが、知ったところでどうなるものでもない。

それからしばらくの間、こずえは遅くなることがなかったので、玄関横の『例の場所』に近付くこともなかった。
もちろん気にはなっていたが、まだ生徒が残っている早い時間に行ってみたところで、無駄足だろうと考えたのである。
そういう現場を見たければ、滅多に人が通らない旧体育倉庫や校舎裏に向かった方が、よほど遭遇の可能性が高いはずだ。ただし、見つかれば自分の身も危ういので、好奇心とのトレードオフになる。
カイボーをやる連中は、クイーン一味だけではないのだ。被害者の多さと発生頻度で、クイーン一味が突出しているまでの話である。
あとは、風紀委員長が襲われてから、口うるさい服装チェックがなくなった。スカートが短すぎるだの、ブラウスのボタンを二つ以上外すなだの、毎朝のように校門に立った風紀委員たちにイチャモンをつけられていた身としては、歓迎すべき変化だった。
聖南たちから聞く限り、風紀委員長は完璧にイカされて理性を飛ばしていたようなので、当分は恥ずかしくて表だって活動なんか出来な

いだろう。こずえはそう期待していた。

「こずえ聞いた？　三組の吉川純菜が襲われたらしいよ」
更に半月ほど経って、聖南と静香が喜々として寄ってきた。
「吉川純菜？」
聞いたことのあるようなないような。こずえが記憶をたぐる。
「元レディースのヤバい子」
「ああ、あの子……」
言われてみるとちょっと雰囲気の違う女子がいた気がした。今は普通の女生徒とあまり変わらないが、一、二年の頃はずいぶん『尖って』いたはずだ。
「やっぱりクイーンに？」
「そ。場所は玄関横と違うけどね。襲われちゃったことは間違いないよ」
「へぇ、そういう子でも狙われるんだ」
「もう怖いものなしなんでしょ」
「どんな風にされちゃったの？」
こずえが身を乗り出す。その手の話は大好物である。
「三十分以上クリトリスを弄られて、イキまくり悶絶」
聖南がこずえの耳元に口を寄せて声を潜めた。
「目茶苦茶悔しがって抵抗したけど、耐え切れなかったみたい」
静香が嬉しそうな顔で付け加える。
「うわー……」と目を輝かせるこずえ。
「クイーンと言えばクリトリスだもんね」
「乳汁噴いてメス逝きしたってさ。惨めだよね」
「へぇ、元レディースでもそうなっちゃうんだ」
「そりゃそうでしょ。クリなんて鍛えようがないもん」
「でも取り巻きの男子たちがビビって、輪姦しは免れたみたいだよ」
「犯っちゃえばいいのに。そこまでイカされたなら、犯されたって分かんないよ」

聖南たちによると、吉川純菜は通学路脇の藪に引きずり込まれたため、悲鳴を聞きつけた通行人にまで襲われ姿を見られたことは間違いないとのことだった。
「それにしても、三十分もクリトリス弄りに耐えるなんてすごくない？　あたしだったら五分も持たないよ、きっと」
こずえが言うと、静香が「元レディースだから、気合いと根性なんでしょ」と笑った。
「ぷぷぷ、恥かき時間が長くなるだけじゃん。延々とクリトリス弄られてもがき続けるくらいなら、さっさと悶絶した方が楽なのに」
「だよね。頑張って悲鳴を上げれば上げるほど、野次馬を呼び寄せちゃうんだもん」
「あの子、ムッチリ体型でオッパイも大きいし、乳揺れまくりだったんじゃない？」
「くくくっ、乳首ピーンで乳プリンかぁ。女の子だねぇ」
「乳踊りしながら乳汁撒いたんだよ、きっと」
「ぷぷぷっ」
笑いを堪えきれないエッチ娘たちだった。
こずえも容易に、野次馬に囲まれた中でクリトリスを弄られてもが

く吉川純菜の惨状を想像出来た。さぞかしいい見物だったことだろう。
気合いと根性も役に立つとは限らないようだ。
「だけど『元』とは言え、一年坊主にそこまで舐められたらあの子も黙ってないかもね」
聖南が含み笑いを漏らす。
「やっぱ、仕返しとかあるのかな」
「あるでしょ。多分だけど」
「うん。レディースって輪姦し輪姦されの世界だって聞くし」
静香が分かったような顔で頷く。
吉川純菜か。あたしも注意して観察しておこうかな。面白い現場を見ることが出来たらラッキーだし。
こずえはその後の展開に期待することにした。

「通学路で藪ったらここしかないよね」
帰り道、こずえは吉川純菜が襲われたと思われる現場に寄ってみた。
別に刑事を気取るつもりはない。ただの好奇心である。
「あ～、これかな？」
すぐに道路から5メートルほど分け入ったあたりの草が丸く倒れている場所を発見した。人ひとりを数人が取り囲んだほどの大きさだ。ここが暴行現場とみて間違いないだろう。
「悶絶するまでクリトリス弄りされたってことは……」
こずえは注意深く失禁の痕跡を探してみたが、判然としなかった。
吉川純菜が失禁していないはずがない。しかし彼女が出した様々な液体は、地面に染みこんでしまったようだ。
改めて草の倒れ方を観察してみる。

「こっちが頭で、道路側に脚かな。ぷぷっ、マンコ見られちゃうじゃん」
次にこずえは道路まで戻って、現場がどのように見えるか検証してみた。
藪の中なので、通行人から丸見えとは言えないようだ。しかし女が襲われているのだから、白い肌は垣間見えていたはずである。吉川純菜が悲鳴を上げていれば、見逃すこともなかっただろう。
「と言うことは……」
野次馬は襲われている女の女性器を見たいと思うはず。ある程度の距離を取りつつ、近付けるだけ近付くと思う。
「あった。ここだ……」
こずえは襲われ現場から2メートルばかり離れた場所に、複数の足跡と踏みしめられた草の痕跡を発見した。丁度大きめの灌木があって、覗いていても目立たない絶好の位置取りだ。
実際にその場所に立って、現場に目を向けてみる。
「丸見えだね、こりゃ」
これで吉川純菜がクリトリスを弄られてもがく姿を、野次馬数人に『ガッツリ』と鑑賞されていたことが明らかになった。更にこずえは残された足跡に自分の靴を重ね、野次馬の少なくとも三名は女子中高生だったことまで突き止めた。
つまり吉川純菜暴行現場は、その三名がスマホで撮影していた可能性が極めて高い。
「よく刑事ドラマで『現場に足を運べ』って言ってるのは本当なんだね。賢くなった気がするよ……」
こうして実際に現場に足を踏み入れなければ、聖南たちから聞いた

以上のことは分からなかったのだ。

こずえは思った以上の収穫に、大いに満足して駅に向かった。

時刻は午後4時過ぎ。

「近道を通っちゃおうかな」

まだ用心する時間ではないだろうと、裏道に入る。

そちらは人通りが少なく、女子は注意すべしと言われているのだが、表通りを行くよりも五分も短縮出来るのだ。

春先に、裏道で二年の女生徒が不良に輪姦されたという噂が流れた事があった。教師も知っていたから事実なのだろう。でもそんなものは運次第だとこずえは思う。表通りにだって危ない人間はいるし、その女生徒はたまたま裏道でそういう目に遭った。それだけのことだ。

こずえの場合は、暗くなる前ならという条件付きで、裏道を通ることが多かった。

スマホを出して、メッセージの整理をしつつブラブラ歩く。

去年だったか、歩きスマホをしていて蹴躓いて転んでしまい、思い切りスカートの中を晒して恥をかいたこともあるが、それしきでへこたれるこずえではなかった。駅の階段を上る際も、スカートの後ろを押さえたりしない。こんな短いスカートでいちいち下着を見られることを気にしていたら、女子高生なんかやっていられないのである。

そして繁華街の外れに差しかかった時。

こずえは背後から迫る複数の足音に気付いた。

最初は気にとめなかったが、何やら切羽詰まったような感じで様子がおかしい。

振り返ろうとした瞬間、誰かにしがみつかれた。

「きゃぁぁぁっ！」

突然のことに悲鳴が漏れる。

見ると身体にしがみついているのは同じ高校の制服を着た女生徒で、すぐ後ろから数名のガラの悪い者たちが追いすがっていた。

しかも顔を確認すると、その女生徒は件（くだん）のカイボークイーンではないか。

「え、何？　何？　ひゃぁっ！」

訳も分からぬまま、クイーンの勢いに負けて転倒してしまう。

ヤバい。襲われる!?　こずえは捲れ上がったスカートの裾を押さえ、開いてしまった股を閉じた。

こんな路上で捕まったら終わり。女の子をやめますかってレベルのひどい有様を晒すことは確実だ。

公衆の面前でクリトリスを掘られてイキまくる女子高生。そんなの嫌だ。野次馬は楽しいだろうけれど、襲われる側はたまったものではない。

絶望感で目の前が暗くなりかけたこずえの視界に、ワゴン車が現れて止まるのが見えた。

追いかけてきた連中がクイーンを引き剥がそうとするが、クイーンは必死にしがみついて離れない。

「ひぃぃっ！」

しかし幸運にも、追っ手は無様にスカートの中を晒したこずえには興味がないらしかった。

無理矢理クイーンの身体を抱え上げて、ワゴン車に引きずり込んで

しまう。
「きゃぁぁっ！　誰かぁぁぁっ！」
こずえはクイーンが脚をバタつかせながらワゴン車に吸い込まれるのを見た。もちろんクイーンもまた、スカートが捲れて下着が丸見えだ。
ワゴン車は内部にビニールシートを貼った『レイプ仕様車』だった。襲われた女はすぐに失禁するし、色々な液体を出すので、掃除しやすいように改造してあるのだ。
追っ手もみんな、関わり合いになりたくないような面相の者ばかりだった。
「……」
あれ、狙われたのは自分じゃなかった？
一体どうなっているのか。
こずえは唖然と、車内でヒン剥きにかけられるクイーンの姿を見つめた。
「……あ、そういう事か」
ようやく、クイーンが自分を身代わりに仕立て上げるつもりだったことに気付く。と言うことは、これって超ラッキー？
こずえは俄然、元気を取り戻した。
追っ手はワゴン車の後部座席にクイーンの身体を放り込むと、それっとばかりにスカートを捲り上げ、下着を毟りにかかった。
どうしてクイーンがハイエースされているのだろう。
訳が分からないけれど、クイーンが目の前で襲われているのは事実だ。こずえは急いで手にしたスマホを向けた。
「イヤァァァァッ！」
猛烈に抵抗するクイーンだったが、寄ってたかって押さえつけられてしまったのでは、為すすべがなかった。ものの数秒で、股間に女の子のシンボルである陰裂が見え隠れし始める。
（やったぁ）
こずえは捲れたスカートを直すのも忘れて、クイーンがマンコを曝け出される瞬間をスマホに収めた。
（あ、あれって吉川純菜じゃん！）
そっか、例の仕返しか。襲撃側の中に吉川純菜がいることに気付いたこずえは、これがクイーンに対する復讐劇だと理解出来た。道理で見向きもされなかったわけだ。
クイーンが自分を身代わりにしようとしたことは腹立たしいが、結果オーライである。
「あひぃぃぃっ！　止めてぇぇぇっ！　あああああっ！」
ヒン剥き側は四人もいる。
さしものカイボークイーンも数の暴力の前には、はしたなくも悲鳴を張り上げる一人の女子高生に過ぎなかった。自分が襲われる事態なんか、考えたこともなかったのだろう。
「まだツルッパゲじゃんか」
吉川純菜の嘲笑う声が響く。
追っ手はクイーンの下着を引きずり下ろすと、速攻で股をこじ開けにかかったのだ。
「イヤァァァァッ！」

甲高い悲鳴を上げ、太腿に筋を浮かべて力を込めるクイーンだったが、やはり抗う術はなかった。生木を裂くように股が開いてしまい、くっきりと切れ込んだ陰裂が露わになる。そのまま太腿の付け根が引き攣るほどの大股開きにされると、クリトリスのサヤが弾けて小陰唇の一部が覗いた。

クイーンが引きずり込まれてからここまでで十秒ほど。

追っ手の動きはそれほど素早く、手際が良かった。

（なるほど、確かに……）

クイーンのマンコは、一本の恥毛も生えていなかった。下から上までツルンツルンの肌色である。うぶ毛くらい生えているのか、それすらまだなのかは、判別出来なかった。

陰裂は長い方だろう。しっかりとワレメの上端に窪みの残った、後期スジマンだ。こずえは目の前でそれを見た。

マンコを晒されたクイーンは激しく身をよじって暴れていたが、両腕両脚を押さえられてしまい、悲鳴を張り上げる他に出来ることはなさそうだ。

制服の上から見た印象よりも尻周りの肉付きが良く、女らしい体型をしている。太腿もムッチリと太目だ。

「イヤッ！　イヤッ！　イヤァァァァッ！」

クイーンの脚の間に移動した吉川純菜がマンコに指を伸ばし、クリトリスを掘り起こしにかかったところで、ワゴン車が動き始めた。内側からドアも閉じられてしまう。

「そんなぁ……」

これからなのに。あの子がどんなクリトリスをしているのか、見てやりたいのに。こずえが不満げに口を尖らせた。

車内から漏れるクイーンの絶叫が遠ざかっていく。

それでもワゴン車が信号で止まってくれたので、僅かな間だが暴行現場の続きを後部の窓越しに覗うことは出来た。

「もう、最後まで見せてよ～」
クイーンはマンコを出されると同時に、ブラジャーも外されたようだ。腕は吉川純菜の他に六本もあるのだ。わけなく裸に毟ることが出来るだろう。
こずえの半分もない小振りな乳房が見えたり隠れたり。乳首はさすがにまだ勃っていないようだ。
片方の足首に引っかかった下着が、旗のようにひらひら揺れる。
これで、カイボークイーンと異名を取るエロ娘も、乳房とマンコを晒された、襲われ女の定番ポーズに成り果てたことになる。
「撮れるだけ撮ってやるもんね」
窓の向こうで、左右に大きく拡がった太腿が間断なくジタバタもがき続けており、時々ビクンと突っ張った。それは間違いなく、女がクリトリスを弄られた時の反応だった。
そしてこずえは、クイーンの脚の間に放物線が噴き上がるのを見た。
「キィィ」と身も世もない悲鳴が聞こえる。
「ぷぷぷ、もう失禁？　クリトリス剥かれちゃったかな」
クリトリスを探り当てられただけで、女があそこまで激しく失禁することはないだろう。きっと吉川純菜にクリトリス包皮を裏返されたのだ。
「あの子も自分が襲われた時にはあんな悲鳴上げちゃうんだ～」
クイーンがもがくので、失禁の放物線が左右に乱れる。小水が噴き出す勢いは、静香以上であるようだ。
こずえはスマホを構えたまま、息が切れるまでワゴン車を追いかけて走った。
しかし車の速度に追いつけるはずもなく。

クイーンの失禁が続いていたことは確かだが、追跡を諦めざるを得なかった。

三、こずえの『勇姿』

クイーンが襲われたのは週末だった。

家に戻ったこずえが、スマホの動画を暗記するほど繰り返し再生した事は、言うまでもない。

おそらくあの子が襲われる姿を撮ったのは、自分が初めてではないか。そう思うと誇らしくてたまらなかった。

こずえは月曜になって登校すると、いの一番に聖南と静香の席に向かった。

「えっ、姫が襲われたの？」

「うそー」

聖南と静香は目を丸くして驚いてくれた。とても気分がいい。

「姫？」

「あ～……ええっと、ほらあの子って男子を従えてまるでお姫様みたいに振る舞ってるじゃん？」

「そ、そう。だからあたしたち、姫って呼んでるんだ。深い意味なんかないよ」

聖南たちは何故か、しどろもどろだった。

「ふぅん、まあいいや。現場撮ったから見るよね。連れ込まれてすぐに車が動いちゃったから、初っぱなの裸に剥かれるところしかないけど、マンコはバッチリ映ってるからさ。あとオシッコ噴いてるところも」

こずえが言うと、二人は大喜こびで乗ってきた。

「え、失禁しちゃったの？」

「うん。パンティ脱がされて、すぐに吉川純菜にクリトリスの皮剥きされちゃったんだよ」

「へぇ……ヒィヒィだったんじゃない？」

「もちろん。『ヒィヒィ』じゃなくて、『キィキィ』だったけどさ」

「うわー」

二人は何やら感極まった顔をしていた。

「あの子、生えてた？」

「ううん、ツルツルだった。スジマン」

「あー、やっぱり。そうだろうと思ってたけどさ」

「まあ、見れば分かるよ」と動画を再生して見せる。悲鳴が響くと他の女子が寄って来そうなので、ボリュームを絞った。

「え～と、泣きそうになるほど嬉しいものなのかなぁ……」

こずえが戸惑った声を上げる。

聖南と静香が、ヒン剥きにかけられるクイーンの姿を見つめながら、目を潤ませていたからである。

連中にいいようにイカされてしまった屈辱が忘れられないのは想像がつくが、大げさに過ぎる気がした。普通は「ざまぁみろ」と笑う場面ではないだろうか。

こずえはもちろん、聖南たちが襲われている現場を覗いていたこと

がバレては困るので、何食わぬ顔を通していたが。

「すごいじゃん！　お宝だよ！」

遠ざかるワゴン車が画面から見えなくなると同時に、聖南に抱きしめられた。

「大手柄なんてものじゃないでしょ」

静香にもひっつかれた。

「そ、そう？　たまたま居合わせただよ、たまたま」

大きな乳房と小振りな乳房を、左右からグイグイ押しつけられながら、こずえが謙遜する。ここまで喜んでもらえるとは思っていなかったので、ちょっとしたヒーロー気分だった。

こずえは二人にせがまれて動画を5回も再生した挙げ句、転送することを約束させられた。お返しに、二人が持っているエロ動画や画像の類いを貰える話になったので、こずえとしても大満足である。

その翌日、こずえはまた部活で遅くなった。

「久しぶりに覗いてみようかな」

折角なので、玄関横の『例の場所』に立ち寄ってみることにする。

そう都合良くカイボー現場に立ち会えるとも思えないが、最近はツイているみたいだから、確認する価値はあるだろう。

「ん、あれは……吉川純菜じゃん」

途中で校門を小走りに出ていく吉川純菜の姿を見かけた。誰かに追われているのか、しきりに後ろを振り返っている。

こずえは立ち止まって観察していたが、追っ手の姿は見えなかった。

「聖南が吉川純菜の襲われ現場もあるかもとか言ってたっけ。ぷぷ、楽しみだなぁ」

「……ちぇ、外れかぁ」

玄関横の小部屋は静まり返っていた。

まあ、仕方ない。大人しく帰ろう。

口を尖らせて下駄箱に向かう。

すると、階段を下りてきたクイーンと出くわした。

ぎょっとするこずえだったが、素知らぬ風を装う。

「あれ？」

こずえの顔を見たクイーンが立ち止まった。ビビりつつ振り返ると、顎に手を当てて考え込んでいる。

ヤバい。こずえはあの時、クイーンに顔を見られているのだ。

「ねえ、先輩」

クイーンが目の前に回って見つめてきた。

「な、何？」

「あ～、やっぱり」

「は？」

「とぼけちゃって。こんなに早く見つけられるとは思ってなかったよ」

バレた？

これは本格的にヤバい。

こずえは回れ右して逃げ出した。

「捕まえて！」

クイーンが叫ぶ。
「ひぃっ！」
こずえは上履きのまま玄関から外に飛び出そうとしたのだが、その前に下駄箱の陰から手下の男が現れて向かってきた。聖南に『一番槍』を突き刺した男だ。
組み付かれる寸前で身を翻し、階段を駆け上る。
ブラウスを掴まれて間一髪で振りほどいたので、ボタンがみんな弾けてしまった。
しかし、露わになったブラジャーを隠しているゆとりなんかない。捕まったら最後、聖南や静香と同じ目に遭うのだ。
バタバタバタッ！
二年生の教室が並ぶ廊下を全力疾走する。八十五センチオーバーの乳房がブラジャーの下で跳ね踊った。
「ひぃぃぃぃっ！」
背後から追いすがる男たちの足音が聞こえる。じきに乳房がブラから飛び出してしまったが、それどころではない。
突き当たりの階段を無我夢中で駆け下り、体育館に通じる十字路を左に折れた。手前の柱の後ろには、撮影機材を手にした聖南と静香が立っていたが、こずえは気付くことなく乳房を踊らせながら走り去った。
「……今の、こずえだったよね」
「う、うん」
「なんであの子が追われてるわけ？　吉川純菜に仕返しの仕返しするって話じゃなかったっけ？」
「さあ……」
聖南と静香はキツネにつままれたような面持ちで、こずえの後ろ姿を見送った。
「うん、作戦変更。吉川先輩には逃げられちゃった」
玄関ではクイーンが一人佇んで、スマホを耳に当てていた。
男たちがこずえを捕まえて来るのを待っているのだ。
「え、同級生？　あ～、あの時捕まえそこなった人だったんだ」
クイーンが楽しそうに「それはラッキー」と笑う。
「顔バレしたらまずい？　分かった、頭に袋被せとく。撮影よろしくね、センパイ方」
そこへ、とうとうとっ捕まったこずえが運ばれてきた。
脇の下と足首を抱えられたムッチリと肉付きのいい女体が、往生際悪くもがいている。
こずえは乳房をしまう機会がなかったらしく、前がはだけて乳房が両方ともボロンとこぼれていた。スカートも丸捲れだ。ボリュームたっぷりの乳房がゆさゆさ揺れて、大層いい眺めである。
「……あの後で、あたしは腰が抜けるまでクリトリス弄られちゃったんだよ？　どうしてくれるんですか、センパイ？」
クイーンがこずえの耳元で囁いて、乳房を鷲づかみに捏ねた。
「失禁するところバッチリ観察されたし、イカされて記憶飛んじゃうし、散々だったんですよ？　予定が狂っちゃったじゃないですか。センパイ、　ひょっとしてあたしが襲われるところ見てました？」
そしてこずえの返事を待たずに「でかい乳しちゃって」と、乳首を摘まみ上げてタプタプ揺さぶる。言いがかりもいいところだ。
「ひぃぃぃぃっ！」

「どこかで乳出ししてやったの？」
「うんにゃ。走り回ってるうちに勝手にこうなってたんだよ」
男子がヘラヘラ笑う。
「あ～、ブラから飛び出しちゃったのか。この大きさならそうなるよね」
「触らないでぇっっっ！」
しつこい乳房揺らしにこずえが抗議するが、輪をかけて乳首を摘まみ上げられただけだった。
「これから腰抜けるほどイカせてあげるね」
「イヤーッ！」
「頑張って抵抗して。ふふふっ」
クイーンがこずえの頭にスッポリと麻袋を被せた。指先を下駄箱裏の『例の場所』に向けて、くすりと笑う。

そこへ聖南と静香が合流した。
聖南がビデオカメラを、静香は高そうな一眼レフを手にしている。
「これならバレないでしょ」
クイーンの言葉に二人が緊張気味に頷く。やはり毎日顔を合わせる同級生相手に、裏切りがバレるのはまずいのだろう。
「このセンパイがイキ堕ちしたら外すけどね。そうなった女はどうせ何も見えていないから、心配いらないと思う。それでいいよね？」
二人は今度ははっきりと頷いた。

「やめてぇぇぇぇっ！」
突然袋を被せられて視界を奪われたこずえは、たちまちパニックに陥った。
どこから手が伸びてくるのか、自分がどんな状態にあるのか、何も見えない。
男たちはこずえの身体を窓際 ―― それは奇しくも聖南が輪姦されたスペースであった ―― に降ろした。
しっちゃかめっちゃかに手足を振り回し、乳房がプルンプルン揺れる姿に、一年坊主たちの失笑が漏れる。
こずえの下半身は、太腿が太く尻も大きかった。太腿はどちらかと言うと筋肉質。ウェストが締まっているので太めには見えないが、将来お肉がつき始めると一気に体型が変わってしまいそうな危うさがある。しかし現状では、ナイスプロポーションのムチムチ娘には違いなかった。
「どんなマンコしてるかな～」
クイーンが脚の間の『定位置』に腰を下ろして、こずえのスカートを腰の上まで捲り上げた。
「食い込んじゃってすごいね。ワレメ長そう」
「ひぃぃぃっ！」
クイーンの指先に下着の食い込みに沿ってなぞられ、こずえが悲鳴を張り上げる。
「あひっ！ いやぁぁぁぁっ！」
しかも腕を押さえた男子たちに、両乳房を揉まれながらのおまけ付きだ。

クイーンはいつも、捕まえた女のマンコを最初に露出させる。
こずえもそのようにして下着をズルリと太腿まで下ろされ、いきな

り下半身が涼しくなった。乳房はすでに丸出しで、乳首が両方とも天井を向いていたが、あくまでたまたまである。
「やっぱりスジマンだね。やたらワレメ長くて目立ってるし」
「いやぁぁぁぁっ！」
袋越しにフラッシュの光がチカチカ光るのが分かった。
静香が早速カメラのレンズを寄せて、露出したマンコを撮りまくっているのだ。もちろん聖南もしっかりとビデオカメラを向けて、一部始終を記録していた。
「ひぃぃぃっ！　見ないでっ！」
太腿をよじって隠そうとするが、腰を押さえられて正面を向かされてしまう。
「マン毛薄いねぇ、センパイ。これなら、中学を卒業するまでツルッパゲだったでしょ？」
「恥ずかしいっ！　ひぃぃぃっ！」
でかいマンコだった。深さのある、くっきりと目立つマンコだった。静香と同系統だが、こずえの方が一回りは大きくて長さがあった。
「見てやりなよ、このワレメ女」
クイーンを始め、男子たちや聖南と静香にもまじまじとマンコを鑑賞されてしまう。そして、こずえ本人にはそれが分からない。しかし女の本能で恥部に視線を感じるようで、必死に抵抗を続けていた。
聖南と静香の顔に、罪悪感のようなものはまるで感じられない。ムチムチの同級生女子がどんなマンコをしているのか、どんな乳房をしているのか、どんな悲鳴を上げるのか、興味津々なのだ。自分が襲われたのだから他の女も。ひたすらに女の行動原理に忠実であった。
静香が聖南に何やら耳打ちして笑う。マンコの品評でもしているのだろう。聖南が頷いて、こずえの捏ねまくられる乳房を指さして囁き返すと、静香がレンズを向けてフラッシュを浴びせまくった。
高校三年生までカイボーされることなく過ごしてきたラッキー娘のこずえも、とうとう年貢の納め時が来たようだ。ムチムチ体型女子はタダでさえターゲットにされやすいものである。一度も襲われずにいられたこと自体が奇跡なのだ。
「ひぃぃぃっ！」
視界を奪われたこずえは半狂乱の体だ。
間断なく乳房を捏ねられ、晒されたマンコを正面からクイーンと同級生二人に観賞され、しっちゃかめっちゃかに手脚を振り回す。
しかも男子二人に両腕バンザイで押さえられているせいで、どう足掻いても脱出は不可能に見えた。
「タケ、舐めてみる？」
クイーンが小柄な眼鏡男子を振り返った。
「い、いいのか？」
「ここしばらくクリ剥きから始めてるから、ちょっと趣向を変えてみようかなと思って」
この辺にクリトリスがあるはずだから狙ってと、ワレメの上端からやや下がった位置を指差してみせる。
「ま、任せてくれ」
タケと呼ばれた男子が、嬉しそうにこずえの暴れる下半身ににじり寄る。そして数回蹴飛ばされつつも脚の間に潜り込むと、一気に顔の半分ほどもあるでかいマンコにむしゃぶりついた。
「ひ……ひっ、ひぃぃぃっ！」

仰天したこずえが金切り声を上げる。
クイーンたちが見守る中、タケの鼻先がズブズブと陰裂に『埋まった』。めり込んだと言った方がいいかもしれない。こずえのマンコは大陰唇がぽってりと肉厚で、陰裂が深いのだ。
「イヤァァァァァッ！」
こずえは乳房を捏ねられ続けていたが、それどころではなくなったようである。太腿が激しく乱れ、タケの顔面を締め付けた。
「早くクリトリス探しなって」
こずえの反応から、まだタケの舌先がクリトリスに到達していないと見抜いたクイーンが、クスクス笑う。
「もがっ」
タケの鼻先が、陰裂の内側でクリトリスの位置を探りながら、上に下にと動き回った。
「お前、教育実習生を襲った時も焦ってクリに吸い付いて、思い切り失禁浴びただろうが。気をつけろよ？」
「もがっ」
別の男子の忠告も、タケの耳には届いているのか怪しかった。
「もうちょい上だと思うよ？」
クイーンが指先で陰裂の頭を引っ掛けて引き伸ばした。女性器はそうされると、クリトリス包皮がめくれてしまう構造になっているのだ。
こずえの長い陰裂がムニョーと伸びて、すごい眺めになった。まるでワレメお化けだ。
「でっかいマンコ」
クイーンの呆れたような声に男子たちの笑いが重なった。
聖南と静香の両名も、至近距離でこずえの引き伸ばされた陰裂を目にして、堪えきれずに笑っている。
こずえの深い陰裂はこれだけ引き伸ばされてもクリトリス器官が露出することなく、わずかにサヤの一部が覗くにとどまっていた。タケの鼻先の横で見え隠れしているピンク色の部分が、クリ豆本体であろう。つまり、タケの舌先は小陰唇の輪の内側あたりを探っていたのである。

「タケったら女のクリトリスも満足に探せないの？」
クイーンが呆れ顔で指先で陰裂の上の方を押し拡げた。
「何人襲われる女を見てきたのよ。ほら、これでしょ。分かる？」
露わになる太目のクリサヤ。
こずえのクリトリスは、クイーンの狙い通りにワレメの内側でツルンと綺麗に剥けていた。楕円形で中々に立派なクリ豆だ。聖南のクリトリスよりも明らかに大粒だ。
「やめてぇぇぇっ！　あひぃぃぃっ！」
視界を奪われていたって、マンコを開かれたら内側が涼しくなるので、何をされたのかくらい想像がつく。
焦ったこずえが太腿を閉じようとするが、脚の間にタケに入られているせいで動けない。そもそも腰を押さえられてしまうと、どうバタついたところでマンコの位置は変わらないのだ。

暴れる女体の右側には、こずえが聖南たちの襲われ現場を覗き見した窓があって、夕暮れの残光が差し込んでいた。こずえにとって幸いなことに、窓の向こうに第二のラッキーガールの姿は見えなかった。もし覗かれたら、聖南とこずえの女体がそっくり入れ替わった状態で、

すべてが丸見えだっただろう。

「くひぃぃぃぃぃっ！」

突然こずえの脚が左右に大きく拡がって突っ張った。

ついにタケにクリトリスに吸い付かれたのだ。しかも剥けクリ直撃。

「きぃぃぃぃっ！　くきぃぃぃぃぃっ！」

我慢も何もなかった。目から火花が散って勝手に脚が拡がり、小水が噴き出す。

「ぷはぁっ？」

いきなり顔面に失禁の直撃を食らったタケが、裏返った悲鳴を上げて尻餅をついた。

「わはははは っ。お前、学習能力ないのかよ」

「ふふっ、タケらしいんじゃないの」

クイーンは笑いつつも、こずえの陰裂を引き延ばした指先を、離さい。だからこずえは、長い長いワレメのど真ん中から小水を噴く様子を、連中の前に晒されることとなった。

シャーッと大きな失禁音が響く。

腰の脇では聖南と静香が、容赦なくレンズをこずえのマンコに向けながら、何か囁き合っていた。

「スプリンクラーみたいだね」

クイーンがこずえの有様を見つめながら笑う。

スジマン娘の宿命で、こずえの小水は大陰唇に当って幾筋かに分かれて陰裂から噴き出していたのである。それは潰れたホースから水があふれる有様によく似ていた。

「もっと股広げてやれば落ち着くかもよ」

クイーンの一言で失禁真っ最中の両脚がこじ開けられる。

「ひぃぃぃっ！」

「はいはい、暴れない暴れない」

抵抗を試みるこずえだが、男子二人の手であっさりと大股開きにされてしまった。

「ほらね」

股がある角度より拡がると、乱れていた放物線がひとつにまとまって遠くまで伸びた。

スジマン娘でも大股開きにされてしまうと、ピタリと合わさった陰裂もつられて開くことになる。こずえは陰裂の内側に収まった小陰唇とクリトリス器官一式をわずかに覗かせる程度だったが、それでも尿道口周りの小陰唇が少し開いたおかげで、放物線が安定したのである。

シャァァァァッ！　失禁音が更に大きく響く。

「スジマン娘を失禁させるときは大股開きね。タケ、覚えといて」

クイーンが得意げだった。

大抵の女は、自力で失禁を止めることが出来ない。

聖南と静香がそうだったし、ハイエースされたクイーンもまたシャーシャー失禁しながらもがくしかなかったのである。そしてこずえも例外ではなかった。

「ひぃぃぃっ！　見ないでぇぇぇっ！」

頭に袋を被されていても、失禁したことくらい自覚できるものだ。

スジマンから小水が噴き出す様子を晒され、覗き込まれながらジタバタ抵抗するこずえだが、当然動くこともままならない。

「いい格好ね、先輩」

「見ないでぇぇぇっ！」
もちろん乳房を捏ねられながら失禁する一部始終は、ビデオカメラと写真にバッチリと撮られている。アダルトビデオもかくやの有様だ。誰もがスマホを持つ時代になり、カイボーにせよ輪姦にせよ、現場を撮られるのが当たり前なのだ。
「ご開帳行くよ～」
クイーンの指先がこずえの陰裂をぐいっと押し広げた。手下共が一斉に頭を寄せてマンコの中身を覗き込む。こずえ本人は抵抗に必死でマンコを開かれたことに気付いていないようだ。
男共の視線は主に好奇心であり、同性の視線は品評のそれだった。
聖南がいち早く小水を噴き上げる尿道口にビデオカメラを寄せる。一呼吸遅れて静香がカメラのフラッシュを浴びせた。
こずえは小陰唇が小ぶりなせいか、剥き出しになった『女一式』は行儀良くまとまった印象だった。文句なしの『美マン』であろう。
「しっかり見てやって」
クイーンが男子たちがこずえのマンコを鑑賞する様子を眺めて得意げだった。
「ワレメ深いよね～。このタイプの子ってトイレで苦労するんだよね。しっかり股広げないと変な方向に飛ぶからさ」
クスクスと笑いを漏らしたのは聖南だ。静香は身に覚えがあるのか、頬を赤くしていた。
「クリサヤ太いじゃん。恒例の豆剥きと行きますか」
失禁が一段落すると同時に、クイーンがクリ皮をめくりにかかった。クイーンの手にかかって、クリトリスを剥かれずに済んだ女はただ一人としていないのだ。
「くひっ！　きぃぃぃっ！」
何をされようとしているのか察知したこずえの太腿が猛烈に暴れる。
「はいはい。押さえて押さえて」
「嫌ぁぁぁぁっ！」
「センパイ、しっかり抵抗しないとクリトリス剥かれちゃうよ～」
「ひぃぃぃっ！　ひぃぃぃっ！」
残尿を噴きながら金切り声を張り上げるこずえだが、やはり男子たちに押さえ込まれてしまっては逃れることはかなわなかった。
「うきぃぃぃっ！　きぃぃぃっ！　ひぃぃぃっ！」
クイーン指先が、こずえのクリトリス器官をサヤごと摘まんで持ち上げた。早くもクリ豆が包皮の内側から頭を覗かせる。
そのままガクガクと跳ねる腰を押さえられ、乳房を捏ねられたまま、ツルンとクリトリス包皮が裏返された。一瞬の早業だ。皮の中から掘り起こされ、クイーンの指の間に現れたクリトリス亀頭に、静香が立て続けにフラッシュを浴びせる。
「立派なお豆じゃん」
男子たちに先立って、女性陣がこずえの股間に頭を寄せて鑑賞する。女のクリトリスは股を開かせて陰裂を広げ、さらに包皮を剥かないと見ることが出来ないので、同性であっても間近に見る機会は少ないのだ。こういう事でもなければ。
「きぃぃぃっ！　ひぃぃぃっ！」
クリトリスを完璧に剥き上げられたこずえの太腿が、仰向けに裏返されたカエルみたいに、ピクピクと痙攣するように動いた。
一部の女子はクリトリスを剥かれると、このように股が勝手に拡が

って閉じられなくなってしまう。こずえはこんな目に遭ったことがないので、自覚はないけどそのタイプなのだった。
頭に被せられた袋の下で表情は焦りに歪んでいたが、どう頑張っても股を閉じることが出来ない。身体が言うことを聞いてくれないのだ。
「簡単にクリ剥かれちゃって。吉川純菜センパイも股を閉じられなくなっちゃう女だったよね。クリを剥いた後はイタズラし放題でさ」
クイーンがクリサヤをめくって押さえたまま馬鹿にしたようにニヤつく。
「レディースとか言って突っ張っていたって、所詮はただの女だよ。オシッコ三メートルも噴いちゃってさ。クスクス」
その吉川純菜にしっかり仕返しされて、クリトリスを剥き上げられて失禁させられた屈辱は棚上げにすることにしたらしい。
「さ、見てやって」
女性陣が場所を譲ると、男共が裏スジまで晒されたこずえのクリトリスを鑑賞した。こずえは悲鳴こそけたたましいが、股を大きく拡げて「しっかり見てください」と言わんばかりの体勢に固まって動けない。
静香がマンコの向こうで捏ねられている乳房に何度かシャッターを切った。ヒン剥かれ直後から揉まれ通しの上にクリトリスを剥かれるに至って、乳首がピーンと勃っているのを見つけたのである。
こずえはクリトリスも立派だが、乳首もしっかりと天井を仰いで並び、女子高生にしては見事だった。
「乳汁を噴かせてあげるよ、センパイ」
クイーンがその乳首を片方ずつ指先でピーンと弾いた。
「あひっ！ あひっ！ くひぃぃぃっ！」
人気のない廊下にこずえの悲鳴がこだまする。
悲鳴の発生源の中心では、人だかりに埋もれた形でがっちりと両手両脚を押さえつけられ、クリトリスの裏スジくすぐりを食らう女体がもがいていた。暴れようと力を込めつつ、時折ビクンと身体が痙攣するように反応する。
クイーン十八番の生クリくすぐりだった。
捕まった女は必ずこれをやられる。これに耐え切った女などただの一人として存在しなかった。聖南しかり、静香しかり、吉川純菜しかり。我慢の限界を超えた後に待っているのはメス堕ちなのだった。
「あひぃぃぃっ！ きぃぃぃっ！」
コチョコチョ。コチョコチョ。
くすぐられるこずえのクリトリス亀頭が生き物のように動く。それは完全に勃起して、普段の二倍以上に膨らんでいた。尿道口が魚の口みたいに開いたり閉じたり。しかし膀胱はすでに空っぽで空失禁するばかりだ。
「いひぃぃぃっ！ ひぃぃぃっ！」
男子生徒の一人がこずえの頭に被せられた袋の中を覗き込んで、「すげえ顔してるぜ」と笑った。すかさず静香がカメラを寄せてシャッターを切る。
「目の焦点合ってる？」
「何とか耐えてるって感じだな。でも、こっちの顔は認識できてないと思うぜ」
「クスクス。じゃあ、もっとくすぐってあげなくちゃね」
両脇から絞り上げるように捏ねられる乳房の先っぽには尖った乳首。

時折乳首もついでに摘ままれていたが、まだ乳汁が滲む気配はない。

イカされる。イカされてしまう。

猛烈な快感に抗いつつ、こずえは必死で理性を手放すまいと耐えていた。

年下の同性に嬲られる悔しさとか、女性器を見られる恥ずかしさとか、そんな事は気にする余裕もなくなってしまった。これだけしつこく乳房を捏ねまくられているというのに、自覚する事すら出来ない。

一瞬でも気を抜いたらそれで終わり。快感の波に飲み込まれてメスになってしまう。それが分かっているから、こずえは耐えに耐えた。

「イッちゃえ～」

クイーンの指先が、触れられたくない部分ばかり狙い撃ちにくすぐってくる。クリトリスの裏スジ周りの深くなっている辺りと、クリトリス亀頭側面の根元に近い部分。包皮とクリトリスの接合部。そして小陰唇付け根の外周部。それらは何れもこずえの性感スポットだった。

「あひぃぃぃぃっ！　あひぃぃぃぃっ！」

「センパイ、穴濡れてきたね。もっと気持ちよくして欲しいのかな～」

「ひぃぃぃっ！　ひぃぃぃっ！」

女がクリトリスを弄られているのだ。そりゃお汁くらい出すだろう。

しかしこずえは自分の悲鳴がうるさくて、何を言われたのか聞き取る事が出来なかった。

「センパイってクリ大っきいよね～」

「いひぃぃぃぃっ！　あひぃぃぃぃっ！」

「こんなにクリトリス勃起させちゃって。エッチな女」

「ひぃぃぃっ！　あああっ、あああっ！」

「あ～ん、イカされちゃう～」

こずえが無我夢中で腰を突き上げてくれるので、クイーンは目の前に差し出されたマンコを、好き放題に弄るだけ。楽なものだ。右手でクリトリスをくすぐりつつ、気分次第で左手をあちこちに伸ばす。膣穴に指を入れて湿り具合を確認したり、尿道口も一緒にくすぐってみたり、陰裂を思い切り引き延ばしてクリトリス器官を起こしてみたり。

「あひぃぃぃぃっ！　あああっ！」

「イッちゃえ～」

「あああああああっ！」

襲ってくる快感の波の周期がどんどん短くなっていく。

もう何が何だか分からなかった。

イカされる。イカされる。

最近は聖南と静香が襲われている現場を覗いたり、クイーンがハイエースされる場面に居合わせたりとラッキー続きだったのに、まさか自分が襲われる羽目になろうとは。

「イッちゃえ～」

「ひぃぃぃっ！　ひぃぃぃっ！」

クリトリスから脳髄に直接回路がつながっているかのごとき猛烈な快感が間断なく押し寄せる。

「いひぃぃぃぃっ！」

必死の思いで腰をガクガク振り立ててみるが、クリトリスをくすぐる指先は離れてくれない。

「あひぃっ！」

乳首にツンと快感が走った。誰かに摘まみ上げて転がされたようだ。
「センパイ、乳汁出そうになってますよ？　やらしいなぁ」
からかわれてもこずえには何も聞こえていなかった。

ヤバい。イカされる。イカされる。
そして、いつの間にか窓の外には暴行現場を覗き込む女生徒が二人。これだけ悲鳴を響かせていれば、外まで漏れても不思議はないだろう。しかもその二人はこずえの部活の後輩たちだった。丁度こずえが聖南たちが襲われる現場を出歯亀した時と同じ状況だ。
ただこずえにとって幸いな事に、袋を被せられているせいでマンコは見られても、誰が襲われているのかまでは判別できないはずであった。
こずえの乳房を捏ねている男子がチラと窓の外に目を向けたが、気にする様子はなかった。見るなら勝手にどうぞ、というスタンスのようだ。輪姦現場でもカイボー現場でも、野次馬はつきものである。いちいち追っ払うのも手間だし、襲っている側は野次馬がいたところで何も困らないのだ。
ラッキーな後輩たちは興奮した面持ちで、それぞれスマホを向けていた。角度的に、こずえがマンコを『料理』されている様子が丸見えだろう。この時間は校舎内の方が天井の照明のおかげで明るいのだ。

「いひぃぃぃぃっ！」
こずえの尿道口が開きっぱなしになってきた。
クイーンが「そろそろ限界かな～」と嘯きつつ、陰裂から直立する勢いで勃起したクリトリスをくすぐり続ける。

「きぃぃぃぃっ！」
ビクンビクン。むっちりと太い太腿に痙攣が走った。押さえつけられた腰が、クイーンの頭の位置よりも高くせり上がる。膣穴付近が遮るものなしで露わになり、白っぽい淫汁がとろりと溢れ出ている事が確認できた。上半身の男子がここぞとばかりに乳房を餅のごとく捏ね上げる。

「ふふっ。イッてる、イッてる」
こずえの肌に赤みが差したのを見届けたクイーンが笑った。しかし指先は休めない。
襲われる側にとって恐ろしい事に、クイーンは女を『イキっぱ』にさせるのを得意にしているのだ。
「乳も出始めたぜ」
乳房捏ね担当の男子が得意げに報告した。
彼が言う通りこずえの乳首からは乳汁が一筋、白い乳房に流れていた。
まだ女子高生なので、経産婦みたいに乳汁スプリンクラーになることはない。襲われた経産婦は、乳房が真っ白に濡れるほど乳汁を噴く事も珍しくないのだが。
クイーン一味の活動半径は校外にまで及ぶのだ。手にかけた女は、むしろ教師に咎められる心配のない校外の方が、割合が高いくらいだろう。発育のいい小学6年生くらいから、三十手前のお姉さんまで。連中の守備範囲はとても広い。

そのまま五分ばかり経過した。つまりこずえはずっとクリトリスの

裏スジくすぐりを食らい通しというわけだ。
「ひぃっ！ ひぃっ！ ひぃっ！ ひぃっ！」
イッているのにクリトリス弄りを止めてもらえない。
発狂しそうな快感の中、こずえの理性はどこかに吹っ飛んでしまったようだ。
イッた直後は言葉にならぬ悲鳴をまき散らせていたが、今は「ひぃ」としか言わない。
どれだけ乳房を捏ねられようと乳首を摘まれようと、両腕をバンザイの体勢に伸ばして胸郭を反らせ、嫌がる素振りすらなかった。
押さえつける手が空いた男子がこずえの陰裂を限界まで拡げて『女』を晒して喜んでいたが、それも認識できていないようだ。
「ひぃっ！ ひぃっ！ ひぃっ！ ひぃっ！」
それでもクイーンの裏スジくすぐりは続く。
「あ～あ、お汁垂れ流し」
勃起したクリトリスが面白いようにヒクヒク動く。まるで「もっと気持ちよくして」とおねだりしているかのようだ。
膣穴から溢れる淫汁は、もはやとどまるところを知らなかった。いくらでもにじみ出しては尻の割れ目を伝って床に垂れ落ちる。
「そろそろ袋を外してもいいんじゃない？」
「もう十分だろ」
乳捏ね男が初めてこずえの乳房から手を離して、頭に被せられた麻袋をめくった。
自由を得た大きな乳房が、ゆらゆらとダンスを踊り始める。
こずえの乳揺れは聖南や静香よりも、はるかに動きが派手だった。イカされるこずえが間断なく胸をローリングさせるように悶え狂っていたからである。乳首がピーンと勃っているせいで、あまり女子高生には見えなかった。
「どう？ アヘッてる？」
「ハハッ、すげえ顔してイッてるぜ」
みんなでどれどれとこずえのアヘ顔を鑑賞する。クイーンはその際もクリトリスに伸ばした指を止める事なく、中腰の体勢に身を起こして顔を覗き込んだ。
「ぷぷぷっ。すごい顔」
思わずクイーンが噴き出すほど、こずえのイキ顔は激しかった。
「結構可愛い顔してたはずだけど、コレじゃ思い出せねぇ」
「ヨダレ鼻水涙、全部垂らしてるじゃん」
「目開けてるのに焦点合ってないな」
「メス逝きしてるからだろ」
聖南と静香が、クイーンの後ろからカメラのレンズを差し出していた。まあ、同級生に裏切りがバレたらタダでは済まないだろうし、用心するのも当然だろう。
「大丈夫だよ、完璧に理性飛んでるから」
クイーンに言われてようやく間近にこずえのアヘ顔を鑑賞する。
「クスクス」
「クスクス」
二人の口元がにんまりと緩んだ。
本来は半月前に見るはずだったこずえのアヘ顔だ。予定がずれ込んでしまったけど、結果オーライである。

こずえは裏切り者にアヘ顔を鑑賞されるという屈辱を味わいながら、何も見えていない事は明らかだった。ひたすらに「ヒィヒィ」と息を吐きながら、イキ続けるばかり。

また、窓の外の出歯亀女子たちは、襲われているのがこずえだとは気付いていない様子だった。顔が何とか見える位置取りのはずだが、ここまでのアヘ顔では見分けが付かないのだろう。家に帰ってスマホの動画をチェックして、ようやく先輩が襲われる現場に居合わせた幸運に気付くかも知れない。

「女の子しちゃって」

聖南がこずえの揺れる乳房を追い掛けて、乳首を摘まみ上げて笑った。静香がレンズを向けると、乳房を乳首吊りにしてタプタプ揺らしながらVサインを決める。続いて聖南と静香が交代して、また乳首吊りでVサイン。

「ひぃっ！　ひぃっ！　ひぃっ！　ひぃっ！」

こずえは同級生の指に両乳首を吊られても、仰け反って悶え続けるばかり。目の前にある二人の顔すら判別できないほどのメス堕ちぶりであった。

壁にもたれたクイーンが見守る前で、こずえが輪姦されている。

あれから悶絶寸前までクリトリスをくすぐり続けられた挙げ句に、「お待たせ。やっちゃって」と男子たちに払い下げられたのだ。

こずえ本人はまだ正気を取り戻しておらず、ズコバコ突きまくられても、抵抗するどころか嬌声を張り上げる始末だった。

犯されている事実に気付いていないのだろう。

連中は彼らなりの倫理観を持っているらしく、みなコンドームを装着していた。輪姦も安心、安全が第一である。

「ふふっ、いい獲物だったわ」

腰を振る男子の尻越しに、こずえの大きな乳房が波打つ様子が見えていた。テカって見えるのは照明の加減ではなく、乳汁で濡れているせいだ。

一人が射精すると次の男子が早く代われとせき立てる。

男子の身体が離れた際に、クイーンがこずえの股間に目をやると、くすぐりまくられたクリトリスが勃起した状態のまま、陰裂からピコンと飛び出したまま戻っていなかった。

男子たちの後ろから、聖南と静香が犯されるこずえにレンズを向けている。

二人とも前屈みの体勢でカメラを構えていたので、クイーンの位置からスカートの中が丸見えだった。そろって膣穴を中心にシミが拡がって、陰裂が透けている。

「あたしも濡れちゃったみたい……」

クイーンはこっそりとスカートの中に手を入れて、陰裂にがっちりと食い込んだ下着を引っ張って直すのだった。

その夜、こずえは学校に泊まる羽目になった。

意識が戻ったのは日付が変わる頃だったが、腰が抜けて立ち上がれなかったのである。

着衣が乱れきった姿のまま。乳房もマンコも丸出しで大の字。

ただ、身体は壁際に移動させられており、あらゆるお汁が飛び散っ

て濡れた床も、綺麗に掃除されていた。
ちなみに裸で大の字には理由がある。
クリトリスが勃起したままでは脚を閉じさせると圧迫されて却ってきついのだ。乳首も勃っているのでブラを着けると擦れてしまう。
悶絶後のアフターケアも含めて、クイーン一味は手慣れていると言えた。
「うう……やられたぁ……」
こずえは仕方ないので、仰向けで大人しくしているしかなかった。
呼吸に合わせて丸出しの乳房が緩慢に揺れるのが情けない。クリトリスと乳首がトクントクンと脈打って、まだ快感の余韻を味わっているかのようだった。
「高三まで襲われずに済んだのは、単に運が良かっただけなんだ……」
薄暗い照明を見上げて考える。
「この先も、こういう事があるんだろうな」
他の女のこういう姿を見るのは大好物だ。でも自分だけは襲われたくない。しかし、先の事は誰も分からないのだ。そんな都合の良い我が儘が通るはずもない。
「やられるより、やる側の方が絶対にいいよね」
そう思うと、何となく看護学校に進もうかなと考えていた程度の将来像が、俄然現実味を帯びてきた。
「あたしの学力でやる側になれそうな仕事は、医者なんて無理だからナースか女教師しかないし。新人女教師には輪姦(まわし)が付き物って聞くし」
ナースだって先輩の罠に嵌められたり、夜勤の見回り中に襲われたりと安全とは言いがたいが、大勢の患者を相手にする分だけ目にする女性器の絶対数が違う。女教師には身体検査の立ち会いという特権があるにしても、年に一度の機会しかない。
「……中学生くらいの男の子を射精させてやるのも面白そうだよね」
何回かは襲われる不運を味わう羽目になったとしても、患者の数の方が圧倒的に多いのだ。差し引きでお得であることは間違いないはず。
自分でも不純な動機だとは思うが、役得目当てだって別にいいではないか。
くくく、と笑うと乳首が勃った乳房が波打つように揺れた。
「よし。明日から猛勉強しよう」
進路指導教師は、現状は合格ギリギリと言っていた。だったらしっかりと対策すればいい。
襲われたその夜が、佐和山こずえが本気でナースを目指そうと決心した記念日となった。

完